

---

# **銀木犀を君に… ~銀時、結婚式の夜~**

草紙屋本舗

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

銀木犀を君に…～銀時、結婚式の夜～

### 【Zコード】

N2420M

### 【作者名】

草紙屋本舗

### 【あらすじ】

銀魂、銀時の嵐のような結婚式ストーリー、金木犀の誓いのプチ続編。結婚式の夜のふたりの様子を綴つてみました。プチなお話なので、ほぼ銀さんのモノローグのようなストーリーですが、ご覧くださいませ

田の前に江戸市内の夜景が広がっている。

脇の方に一際明るく見えるのがおそらくカブキ町だらつ。空にチカチカと光っているのは夜間飛行中の飛行機のストロボライトだろうか。

「…おつかれさん」

「銀時さまも…」

ふたりはどちらともなく、ふつと笑いながら短く言葉を交わした。今日、昼すぎから遅れて始まつた結婚式はなんとか無事に終わり、その後志村家を会場に執り行われた披露宴もつゝきほびお開きとなつた。

実は、お登勢や、お妙、あやめにたま、新ハに神楽…参列者みんなで新郎新婦のために今夜の宿を用意してくれたのだ。場所は、神田明神からほど近い老舗のホテル。そしてここは、なんとスイートルーム。新ハからは今夜の宿は用意してあるから、とは聞いていたが、まさかこんな贅沢なところとはねエと、内心今も銀時は驚いている。と、同時に心からみなの心遣いに感謝のキモチでいっぱいである。

…せめて、今夜くらいはいい夢を見てもういてHしな。

彼女はと見れば、バスルームをのぞいてその贅沢なつくりに歓声をあげたり、クローゼットルームの広さに驚いたりとちよこまか楽しそうにしてている。

「…」

銀時が声をかけると、はにかんだような表情で銀時のせばに寄つてくる。そのまま彼女をぐつとだきしめると、肩に頭をもたせるふうにしてながら銀時はため息をついた。

「やつとふたりっきりになれた…」

「銀時さま…」

「…そろそろその呼び方もやめない…？」

「え？」

「だつて、俺たち結婚したンだしイ、夫婦になつたンだしイ…ほかの呼び方あるんじやなアい？」

「…でも銀時さまは、銀時さまですよ?」

「…たとえばア、だんなさま、とかア、おまえさま、とかア…」

「…だ、だ、だんなさま…」

顔を真つ赤にしながら彼女が銀時によびかける。

「ほんとに俺の奥さんになつたんだ…」

「そ、そうですよーだ、だんなさま…」

「んーなんかその言い方、やつぱメイドっぽくてなんか違つかもオ。やつぱア、いつものでいつかア?」

「もうーどっちなんですか!銀時さまは銀時さまですからねー!私、そうしか呼べませんから!」

ちよつとふくれながら彼女が言ひ。そんな怒つた顔もやつぱり可愛くて、銀時は彼女の唇にそつと唇を寄せる。キスの合間に時々もれる彼女のため息が、たまらなく銀時を刺激する。背中にまわした腕をさらこぎつゝ彼女の体に巻きつけるよつただきしめて彼女の耳にさわやく。

「もう離しゃしないH…おまえをずっと護つていくから

「銀時さま…」

彼女の胸に顔を埋めるよつこ、そしてよりお互いの体が隙間なく密着させるかのように、左手は彼女の頭を抱き、右手は彼女の腰を

引き寄せ、銀時はさらに彼女にキスを強く繰り返す…

その時、ドアを遠慮がちにノックする音が聞こえた。

…「ン、ン。

「…結婚式の夜の新婚夫婦を訪問するって、まじですかア…？」

彼女の体を腕の中に抱きながら、舌打ちをする銀時。両腕を銀時の肩にそっとまわしながら彼女が頬を赤らめながら言つ。

「私、行つてきましょうか？」

「…いや、俺が行つてくるわ。ちょい、ここで待つてて」

彼女をそつとベッドにおろし、胸元を直すように着物を調えると、銀時はドアの前まで行き、声をかける。

「…どちらさん？」

「…お花を届けにまいりました」

「頼んだ覚えはないんだけどオ？ 結婚祝的なやつウ？」

「…奥様から」主人様への贈り物となつてありますガ…」

…おいおい、なになに？ それ？

一応、用心しつつも銀時はロツクを外し、ドアを開ける。

「…ウおッ！ 驚いたア！」

銀色のリボンをかけた小さな鉢植を手に、田の前に立っていたのは万事屋の近くで花屋を営む茶吉尼族の屁怒組だった。

「いったいぜんたい、どうしたア？」

「…せつかくおふたりでくつろいでおられるといひか、申し訳ありませんね。

実は奥様からじきじきに『注文いただいていたものですか？』

「それかい？」

「そうです。銀木犀の鉢植です」

「銀木犀？金木犀じゃなくて？」

「はい、銀木犀です。

なんでも奥様が思い入れがあるのは金木犀なんだそうですが、もともと金木犀というのは、この銀木犀が変化してできた種類なんですよ。

銀木犀の方が香りも薄いし、明るいオレンジ色の金木犀の花に比べると、白い銀木犀の花はどうしてもさらに地味なイメージです。でもだからこそ、ご主人となられる方に贈りたい、とわざわざご注文いただいてくださいましてね。

結婚式が終わってから贈つて吃驚させたい、ということでしたので新八様とも相談して、一回りに直接お持ちした次第です。どうぞ、お受け取りください

屁怒紹がいかつい顔をくしゃくしゃにして、嬉しそうに笑いながら、銀時に鉢植を差し出す。

「… そ う な ん だ」

屁怒紹の突然の訪問にも度肝を抜かれたが、この贈り物にも驚かされたのは確かだ。

「銀木犀なんて花があることも知らなかつたなア。

でも、白い喇叭みでエな小さい花がめいつぱい咲いていて可愛いじゃねエか。：嬉しいねエ」

屁怒紹が笑顔をちょっと真顔に戻して、銀時に言う。

「銀木犀の花言葉、ご存知ですか？」

「いや、知らねエな。なにしろ花の存在も今、知つたようなもんだから」

「じゃあ、特別にお教えいたしましょうか。

金木犀は『謙遜』や『眞実』といつたいくつかの言葉があるので、銀木犀はたつたひとつだけなんです。銀木犀の花言葉は『初恋』です。

銀木犀を「主人にどうしても贈りたい、という奥様の気持ち、これでおわかりかと…」

「ああ、ああ、もういいからアーもうこいつてエー！」

屁怒組の冷やかすような顔に気づいて、銀時は思わず顔を赤らめながらその言葉をさえぎった。鉢植を乱暴に受取り、屁怒組の肩をぐいと押しながら、口の端でニッと笑う。

「…ありがとよ、花屋さん」

「どういたしまして。まにじごひこ…」

深々とお辞儀をして屁怒組がホテルの廊下をゆっくり立ち去つていぐ。その姿を見送ると、鉢植をそつと抱えなおし、銀時はベッドのある部屋に戻り、彼女に声をかけた。

「銀木犀、たしかに受け取った…！…？」

ベッドの上では彼女が気持ちよさそうに寝息をたてている。昨晩はほぼ徹夜で準備をしていたから無理もないことだ。

「つて、おいッ！おいおいッ！寝るなッて！おいッ！」

銀時にゆさぶられても、彼女は目を覚ます気配はない。それどころかむにゅむにゅと何かを咳きながら幸せそうに寝息をたてている。彼女を起こすのをあきらめた銀時は、眠りこけている彼女の体を横抱きにすると、そつとベッドの枕にその頭をのせてやる。そしてその隣に添い寝をしながら、サイドテーブルに置いた銀木犀の鉢を見た。

「…初恋かア。言つねエ…」

「そう言いながら、眠っている彼女の頬にそつとキスをする。

「…つてか、これでも目を覚まさねエつてどういうことオ？今夜、俺、どうすればいいわけエ？」

ぶちぶちと愚痴りながら、彼女の髪の毛をゆっくり撫でる銀時。すうすうと寝息をたてる彼女のうなじから腕を差し入れ、腕枕をしながら彼女にもう一度、やさしくキス。

「…まあここかア。」じつせりて寝顔をほんの近づけて見ゆのせじめてだし」

…愛してゐる。

やうに恥きながら、彼女の体に自分の体を寄せせる。あたたかく幸せな時間。閉じた瞼の長いまつげや、きゅっと結ばれたあくらんぼのような瞼にちよこちよこしきみつけにかこを出しながら、やさしくキスをする。

部屋の中は、やれじこ銀木犀の香りで満ちてゐる。

彼女が田を覚ますまで、あともう少しつづく。

おじまー

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2420m/>

銀木犀を君に…～銀時、結婚式の夜～

2010年10月20日19時58分発行